

助郷史料に記されている鎮撫隊

甲陽鎮撫隊（以下、史料に記されている「鎮撫隊」と表記）という名称は日野市民によく知られており、市内にはその動向を示す史料として『河野清助日記』や『佐藤彦五郎日記』が残されている。鎮撫隊は、慶応4年(1868)3月に江戸から甲府に向かって甲州道中を通行、途中の勝沼（山梨県甲州市）で東征軍と戦って敗退したためその活動期間は短かった。このため、鎮撫隊に関する史料は多くはないようであるが、本号では、この鎮撫隊に関する史料のうち、武蔵村山市内に残された史料を紹介したい。

現在、武蔵村山市立歴史民俗資料館には「乙幡家文書」という9300点ほどの史料が所蔵されているが、その「乙幡家文書」のなかに、紹介したい6点の鎮撫隊に関する史料が含まれている。乙幡家は、江戸時代、武蔵村山市域にあった中藤村の名主を世襲した家柄で、6点の史料は、鎮撫隊などの甲州道中通行にともなって、内藤新宿の間屋が、中藤村など同宿の助郷9ヶ村に人足の徴発を指示した廻状である。中藤村は、元治2年(1865)に、田中村(杉並区)・上石神井村(同)・上保谷村(西東京市)・下保谷村(同)・野中新田(国分寺市・小平市)・大岱村(東村山市)・小川新田(小平市)・廻り田村(東村山市)とともに、内藤新宿の助郷とされ、同宿の間屋が人馬の徴発を廻状により9ヶ村に指示することとなった。また、助郷9ヶ村に継ぎ送られた廻状は、留村である中藤村から問屋に戻されることになっていたが、名主の乙幡市郎右衛門が返却しなかったことから同家に多数の廻状が残されることになったもので、鎮撫隊の記事がある廻状はそうしたものの一部である。

これら乙幡家に残された鎮撫隊の記事のある6点の廻状をみると、最も早い日付のものは、慶応4年2月晦日付の廻状で、そこには「新選組御多人数上り」などのために9ヶ村で40名の「正人足」を徴発する指示が記されている。これにつづき、3月1日付、5日付、8日付(2通)、9日付(2通)で廻状が出され、「新選組諸御荷物多分上り」や「新選御組・鎮撫隊諸御荷物数多上り」などにもなう人足の徴発が行われている。また、8日付で出された2通目の廻状(写真)には、戦時の人馬徴発に備える態勢を村々に求める文面とともに、勝沼における鎮撫隊と東征軍との戦いについて以下の記事がみられる。

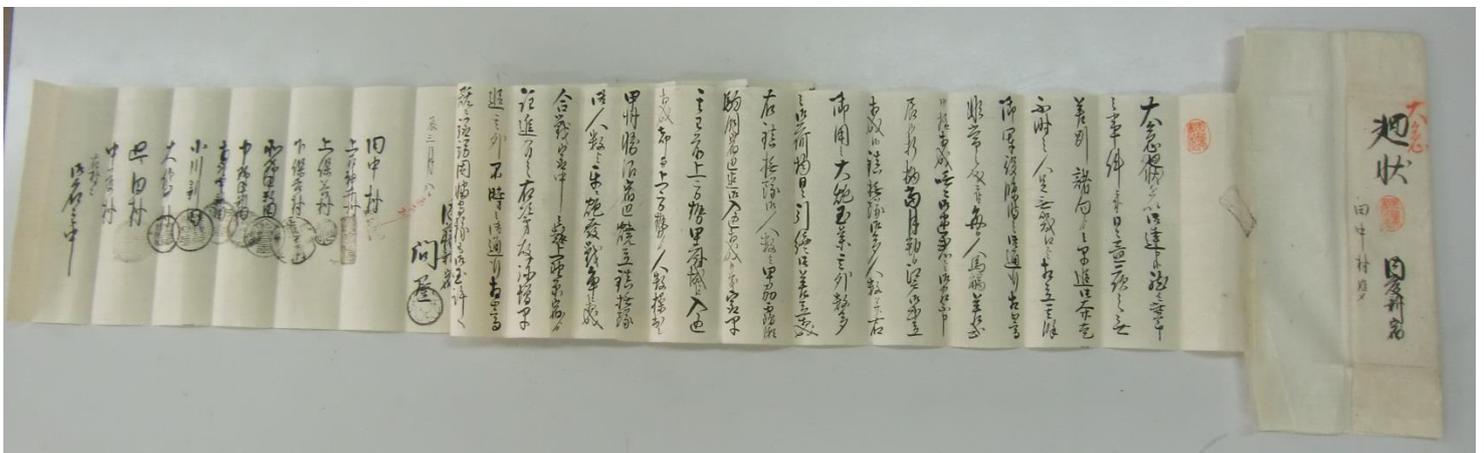
(前略)当月(3月)朔日、江戸ご出立相成り候鎮撫隊ご多人数、並びに右ご用の大砲・玉薬その外数多のお荷物日々引き続きお差し立て相成り、右鎮撫隊お人数は、甲州鶴瀬・駒飼宿辺りまでお入り込み相成り候処、最早その以前、上方勢甲府城え入り込み相成り、却って上方勢より人数繰り出し、甲州勝沼宿辺り焼き立ち、鎮撫隊お人数と互いに炮発戦争に相成り、合戦最中の趣上野原宿より注進これ有り(後略)※

そして、3月9日付の2通目の廻状には、「中初雁宿問屋役人」が伝えた「土州道中方」の「向触」と「上方勢御先方」の記事や、土佐藩兵・因幡藩兵の通行にともなう人馬徴発の予告など、東征軍の動きが記され、ここに鎮撫隊の記事はみられない。さらに、その3日後の12日付の廻状になると、「上方勢」は「御官軍」とされ、人馬徴発を指示する政権が交代したことが認識されており、この日以降の廻状に鎮撫隊の記事を確認することはできない。

以上のように、乙幡家文書にみられる鎮撫隊に関する助郷史料の記事内容を紹介したが、同家に残された慶応4年2月から3月に出された廻状の記事全体を日付順に考察すると、旧政権の下で行動した鎮撫隊などから新たな政権の下で行動する勢力へ、人馬の提供先が混乱のなかで変化する様相を知ることができるのである。このことは、鎮撫隊の状況を示す6点の廻状とその前後に出された廻状が、ともに当時の移り行く情勢を反映している貴重な史料であることを意味しているものであり、これらは甲州道中沿道の維新期の歴史を理解する上で意義ある史料であろう。

なお、『東村山市史7資料編近世1』に収められている廻り田村の御用留には、紹介した6点の廻状を筆写した記事がみられ、武蔵村山市立歴史民俗資料館に所蔵されている渡辺源蔵家文書の御用留にも、同様の記事がみられる。その他、この6点に関しては、『武蔵村山市史通史編下巻』に取り上げられており、廻状の一部は『武蔵村山市史資料編近代・現代』にも収められている。

※史料の文面は、読みやすいように原文を改めてある。



内藤新宿の問屋が、中藤村など9ヶ村に宛てた慶応4年3月8日付の廻状。

(武蔵村山市立歴史民俗資料館蔵)

(日野市古文書等歴史資料整理編集委員会委員 多田仁一)

*平成26年3月15日付広報ひの掲載の「日野の歴史と民俗」160号の詳細版です
日野市郷土資料館にて印刷版を配布しています

問合せ先：日野市郷土資料館

(Tel 042 - 592 - 0981 e-mail museum@city.hino.tokyo.jp)